

『開目抄』に明示される本門戒の諸相(上)

——本門戒壇の戒・定・慧の実義等分類への試論——

大本山本圀寺現燈 早川 日章

はじめに

宗祖は、恩師とも言える伝教大師の業績、殊に法華経廣宣の根源たる円頓の大戒壇建立をこの上も無く讃えられました。ひとつは、本朝初の法華経に基づく戒壇であること、次には、その戒壇に円頓の三学(円戒・円定・円慧)が満たされているからでした。その後比叡山の教学に大変容が起き、第三代座主慈覚以後は真言密教や浄土教が入り込み、伝教大師の遺風は失せたのです。宗祖は叡山遊学の後、恐らくこれを嘆かれたに違いありません。清澄山頂での立教開宗はそこに最大の起因があり、宗祖が後に戒壇理論を組み立てる時も、恩師伝教大師から学んだ円頓の三学は最も重要な構成要素になったであろう。

佐渡在島中の二年半に打ち出された三大事(後の三大秘法)は宗祖の教学の帰結である。本門の本尊・本門の題目について、佐渡配流以前からの遺文も含め、主著『開目抄』、『観心本尊抄』に至ってその内容はほぼ確認出来るであろう。残る一角の本門の戒壇に対する検証方法については如何なる手立てがあるというのであろうか。

ところで、古来より、宗祖は三大秘法の本門戒壇について『三大秘法稟承事』(真偽未決)以外何も教示されなかったという通

説が罷り通り、前述のように『開目抄』の全体理解は人開頭という揺るぎない結論に向かうことが常道でした。宗祖の開迹頭本という深刻で大きな課題を前にすれば、別の角度から見つめるといふ視座を持てなかつたのである。

宗祖は幾つもの抄で、伝教大師の努力により建立した比叡山の大戒壇を高く評価され、円戒・円定・円慧を備えて像法時の広宣流布を為したとも述べられている。この言を頂くと、宗祖が後に建立された独自の本門の戒壇には、三学が機能として備わっていなければならぬと領解される。これは、本門の戒壇を研究する上で、重大な示唆を与えているのではないだろうか。それは宗祖の三学という新しい角度から見つめ直すことである。そこで、小生は本抄に顕れる三学の思想の中に、戒壇に拘わる事柄が必ずや隠されているのではないかと仮定し、只管、至心に拝解しました。すると小生の拙い気付きではありますが、宗祖から頂くことの出来る「本門戒」に関わる情報が数多く存在することを確認しました。予想していたといえ、これは誠に衝撃的な発見で、唯々、驚愕するばかりです。今もって、小生の視点と判断基準に何か誤認があるのではないかと煩悶の限りです。

その上で、敢えて申し上げるならば、『開目抄』は「本門の戒壇」に関することが多々示されている遺文ではないかという提案です。誠に粗雑な知見ではありますが、これが認知されるならば、『開目抄』から密釈が指摘される『観心本尊抄』へと有機的な繋がりがいよいよ膨らみ、『法華行者値難事』、『法華取要抄』で公表された三大秘法の鼎のひとつの、本門戒壇の解明に通じる新しい本門戒壇論の展望が聞かれるのではないか。この拙い小論を踏み台に、本門の戒壇論が宗内でいよいよ進展する

ことをこのころから願うものです。

一、撰述の動機と血脈相承（戒壇）

『開目抄』執筆の動機を述べる各書には概ね三項目が挙げられている。小生もそれに同調しておりますので、今はそれに触れない。小生が加えて取り上げたいことは、文永九年二月十一日に最蓮坊に送った手紙『生死一大事血脈抄』の結語にお書きになられた

「信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり。委細之旨又又申すべく候。恐々謹言。」

の文言である。この手紙は法華の行者が生死一大事の血脈（妙法蓮華經）をどうしたら得られるかが課題とされた。宗祖は種々述べながらも、余りに重要な問題であるために、その結論を持ち越し、次の機会に明らかにする旨を述べられている。そこには密かではあるが、血脈を受けるための戒壇概念が想定されていたのではないかと思われます。後に、最蓮坊は宗祖から授職灌頂を受けたと伝えられています。

ともかくも、宗祖はご自身を含めて法華行者の血脈なるものを、一体どこで、何によって、どのように相承するのか、その血脈相承はどのように担保されるのか、これら戒壇に関する知見を宣明する必要があったと想像いたします。

ただ、同時期に著作進行中の『開目抄』においては、何よりも、ご自分が上行菩薩応現の法華行者であることを、「暗示」という難しく手間のかかる手法を取りつつも、詳しく証明しなればならなかった。それには、龍口法難以来、宗祖が折伏によって受けた世俗的な懲罰に対する解答を出し、末法二百余年、

これまでに真なる法華の行者は誰かいたのか？行者に対する守護が無いのは何故なのか等々、極寒の塚原三昧堂で、宗祖は本抄撰述の正念場を迎えておられた。

不思議なことに、宗祖のご半生は本門戒を抜きにしては全く総括することが出来ない。事実、宗祖教学はその骨格たる三大秘法を以って頂点に達し、宗祖半生の終着点、帰結でもある。宗祖は忍難慈勝の不屈の歩みの中で『ご自身を律するもの・本門戒・遂には本門戒壇建立へと醸成するもの』を類い稀な信念の源泉になされたものと拝解いたします。

重言すれば、釈尊・天台・伝教両大師との経論上での法華思想の承継、法華經の真髓に入り、久遠実成釈迦牟尼仏膝下の事の一念三千の開出などの研学、命を賭して行った折伏伝道と国家諫曉、それに対する受難、そして、佐渡流罪。それらすべては宗祖の内を律する本門戒により支えられ、その帰結が三大秘法であり、本門の戒壇の建立でもあった。

とまれ、宗祖の厳しくも精進のご生涯は、本門の大戒が横溢する大戒壇建立のための、真味豊かな土壌造りであった。目を聞く、心の目を開く、宗祖は深い内省の底から『ご自身を律するもの・内なる本門戒』の全貌を『開目抄』において、重厚に著された。

ここに至れば、私たちは宗祖が自身の体験や信証を語るすべにおいて、語らざる本門の戒の、たゆまざるたくましい働きがあることを密かにして何よりも明らかに知ることが出来るのです。

二、戒と本門戒壇という概念について

本門戒については、法華経と宗祖の遺文とから相当な情報を掴むことが出来るであろうそこでは法華経本門と迹門とを区別し、本門のみから得られるものを本門戒というものでは無い。本門戒には「法師品」「勸持品」「見宝塔品」などから説示される六波羅蜜や五種法師などの戒が本門で止揚されて関わっている。同様に、本門の戒についても本門に限定するものではない。迹門時に建てた叡山の円頓の建物の本門時になると何の価値も無くなるであろうか、そんな筈は無い。或いは、迹門の中で佛が強く要請する誓言などは本門の戒壇において実に重要な役割を果たしている。

ところで、後の『下山御書』に

「又今の高僧等は或は東寺の真言、或は天台の真言也。東寺は弘法大師、天台は慈覚・智証也。此三人は上に申すが如く大謗法の人々也。其より已外の諸僧等は或は東大寺の戒壇の小乗の者也。叡山の円頓戒は又慈覚の謗法に曲られぬ。彼円頓戒も迹門の大戒なれば今の時の機にあらず。旁叶べき事にはあらず。只今国土やぶれなん。後悔さきにたたじ。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 四三三頁

と、叡山の現況に支配される戒壇を嘆かれるが、これは決して、伝教大師の円頓戒壇を否定しているのではない。三国四師を語る宗祖のことであるから、宗祖が往時の叡山戒壇を高く評価しておられることは全く変わりない。殊更に、宗祖が取り上げられていることは、撰時についてである。前述の通り、迹門の戒は円頓戒としても本門戒に対し重要な関わりを持つが、叡山三祖慈覚以来の濁れる山の円頓戒は名ばかりで、既に本来の光を失い、別物に変節している。宗祖は其の変節を指摘し、批判しているのである。台当相対を誤って、迹門の大戒は一切無用で

あるとすると、伝教大師の思想《円頓の大戒》を否定し、円頓の大戒壇の《円慧・円定・円戒》までも否定することとなり、本末転倒してしまいます。祖意は、像法と末法との時代の異なりと、叡山の変節とに対してであります。

さて、宗祖は『四信五品抄』において、以信代慧・信心為本を打ち出されましたが、これはあく迄、初心の行者（在家、入信を希望する者）に対する指導法である。入信時の心の真髓をついた革命的な教法である。信こそ入信を問う鍵である。しかし、同抄にはその教えに続いて、法華経の『分別功德品』を挙げ、

「經文分明に初・二・三品の人には檀・戒の五度を制止し、第四品に到りて始めて之を許す。後に許すを以て知りぬ、初めに制することを。」

『四信五品抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 七七八頁

と、兼行六度、正行六度の中・上級の行者には六波羅蜜の修行を要請している。また、同品の続きには五種法師の修行も併せて勧奨している。我々末法の凡夫でありながら、上人という身にある者としてはこれを肝に銘記し、日常の修行の戒めにしておきたい。

「是の故に汝等如来の滅後に於て応當に一心に受持誦誦し解説書写し説の如く修行すべし。所在の国土に若は受持誦誦し解説書写し説の如く修行し若は経卷所住の處有らん」

『如来神力品第二十一』

佛が上行等の菩薩大衆に四句の要法を付属した直後に、厳しく要請される五種法師の修行である。総じて、仏の嚴命は教師の本門戒と言わずして他の何者でも無い。宗祖が本門の戒壇には三学（円戒・円定・円慧）が不可欠に備わらねばならないと述

べられたことは大変有難いご教示であります。そこで、この小論は宗祖のご意思に沿って、本門の戒壇が備えるべき三学（円慧・円定・円戒）を柱に立て、論考を進めている次第です。

三、本門の戒壇の円戒・円定・円慧の分類および実義について

『日蓮宗宗義大綱』および『同読本』の本門の戒壇の項は、論者にとつては頼みとするところです。三秘の意義には

「三大秘法は、本門の教主釈尊が末法の衆生のために、本化の菩薩に付属された南無妙法蓮華經の一大秘法に基づいて、開出されたものである。日蓮聖人は、この一大秘法を行法として「本門の本尊」「本門の題目」「本門の戒壇」と開示された。末法の衆生は、この三大秘法を行ずることによって、仏の証悟に安住する。」

（『日蓮宗宗義大綱』）

と、定義され、一大秘法の下に三つの秘法即ち、行法があり、我々はそれぞれの三つの修行を為さねばならないとされる。ところが、この定義について

「ところで、唱題修行は末代の観心であるという認識を聖人が持つておられたことは観心本尊鈔に明かな通りである。とすれば唱題は必然的に能観と所観とを兼備しなければならぬ道理で、所観の本尊と能観の題目と、それに修行の道場としての戒壇の三者が要請されることになって、佐渡流罪以降に唱題は本尊と題目と戒壇とに開出されることになったものと考えられる。」

（『宗義大綱読本』 七七―七八頁）

唱題が本尊と題目と戒壇とを開出したと誤って解釈されているため、宗義上で大混迷を起こしている。行法のひとつである題目が一大秘法（一妙）に代わって、本尊と題目と戒壇とを開出するというのである。更に、続いて

「文永八年十一月二十三日佐渡からの第一書である富木入道殿御返事に「天台伝教は粗ぼ釈し給へども之を弘め残せる一大事の秘法を此の国に初めて之を弘む」とて題目をば「一大事の秘法」と呼ばれた。」

（『宗義大綱読本』 七八頁）

と、「題目をば「一大事の秘法」と呼ばれた」と再び、同じ過ちを重ねている。『読本』が教学の根幹・最重要なところで、このような過誤を繰り返すことは不審極まりない。

「大綱」で述べられている「一大秘法」とは、事の一念三千という神奥の真理、み仏でも言い尽くせないほどの世界観・自然観・国土観・人間観・神力観等々を総合し統一する法華思想としての南無妙法蓮華經であると受け止めたい。

「本門の題目」とは称名の南無妙法蓮華經で信心を以て唱える行法であり、これを行ずることを唱題と受け止めたい。従い、唱題は一大秘法とは概念上では全く異なる。

また、『大綱』には戒壇という言葉掲げているが、

「本門の戒壇は、題目を受持するところにそのまま現前する。これを即是道場の事の戒壇という。四海帰妙の暁に建立さるべき事相莊嚴の事の戒壇は、我等宗徒の願業であつて、末法一同の強盛の行業によって実現しなければならない。」とあるが、本門の戒壇を説明しているようで、実は、内容・働き等については何ら説明がされていない。為に、この小論では

何も援用することができない。

従つて、今は宗祖の円頓の大戒壇論に従つて、円戒(本門戒)・円定(本門定)・円慧(本門慧)の大項目を立て、『開目抄』全編に流れる宗祖の『ご自身を律するもの』・本門戒・遂には本門戒壇建立へと醸成するもの』から種々の実義(事柄・要素等)を捉え、大項目へ振り分け、整理をいたしたい。

なお、一妙三秘における本尊・戒壇・題目との関係性は深いのです。この小論の本門の戒壇の円戒(本門戒)・円定(本門定)・円慧(本門慧)は一妙三秘における戒壇・本尊・題目に各々対応し、当然の事ながら、ほぼ同体である。即ち、三秘が互いに相即の関係にあるように、本門の戒壇の内の円戒・円定・円慧等も相即の関係にあるのです。

四、二乗作佛は本門戒壇の円慧の実義なり

爾前経で成仏できないとされる声聞・縁覚の二乗は、自分の解脱に囚われて他を顧みない独善の境地にあるという。自利化他、上求菩提下化衆生の菩薩の立場からは仏種断絶の者と厳しく責められる。善人、賢人を標榜し阿羅漢を得て覚者になつたと称する二乗は、返つて救い難いのである。

迹門での釈尊はこの二乗に救いの手を差し伸べ、一念三千という深奥の真理を打ち出し二乗作佛を示される。しかし、二乗の救いの道は本当に敷かれたのか。

「諸の声聞衆及び縁覚乗を求むるものに告ぐ。我れ苦縛を脱し涅槃を逮得せしめたることは佛方便力を以て示すに三乗の教を以てす」

『方便品第二』

「我れ山谷に處し 或は林樹の下に在つて 若は座し 若は経行して 常に是の事を思惟し 嗚呼して深く自ら責き。云何ぞ 而も白から欺る」

『譬喩品第三』

二乗作佛について、迹門のこのいずれも長文の章でありながら、その取り上げ方は極めて理知的である。十界互具は二乗により断絶していたが、法華迹門において二乗作佛觀により沢山の通氣口が出来て、互具は公式化された。そうした事情から、ともすれば二乗を外観から見る姿勢が強くなり、内に入り、その心情を深く探るといふような立ち位置を持たない。

さて、法華経至上の宗祖においては、どのようなであつたのか。

「諸の声聞等は、前四味の経々にいくそばくぞの呵嘖を蒙り、人天大会の中にして恥辱がましき事、其の数をしらず。しかれば迦葉尊者の涕泣の聲は三千をひびかし、須菩提尊者は亡然として手の一鉢をすつ。舍利弗は飯食をはき、富楼那は花瓶に糞を入ると嫌る。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三〇九頁

宗祖は利己的で独善の境地にある二乗たちを外観からではなく、彼らのその内面に入り込む。誤解され、恥ずかしめを受け、腹の底から嗚咽する縁覚たち。自分を見失い絶望する声聞たち。宗祖は『維摩経』でこのように冷たく描写される彼らを改めて見つめ直す。成仏を閉ざされた彼らへの救いの道を、深く思い遣るまなざしである。

本門壽量品に到り、教主久遠の御声を文上で聞き、文底に迹門一念三千の世界に映る彼らの眞の姿を見つめ直した時、恐らく宗祖の脳奥に閃光が走り、世界が一変したのである。

それこそ、事の一念三千の世界の開出であり、深い思いやり

の交流する真の十界互具の世界である。十界互具世界では、存在するものはその時々々に置かれた存在状況の違いはあれども、常に平等大慧という倫理に包まれ、そして互いが助け合い、導き合い、前進するという実現の世界である。この実現を促し、呼びかける本門の戒壇は、二乗作佛という美しい円慧を具えなければならぬ。

五、事の一念三千、本因・本果の法門は本門戒壇の 円慧の実義なり

「本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ。爾前・迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき頭す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。」

〔開目抄〕池上本門寺編 朝夕諷誦 二九九頁

ここに説かれる事の一念三千、その精華なる二乗作仏と久遠実成、そして本因本果の法門等は本仏積尊がお説きなられた法華経の真実なる根本義である。壽量品の文底から宗祖が開出されたこの一大真理は積尊に返され、そして神力品に至って四句要法が説示する大いなる深義となつて、改めて上行菩薩が結要付嘱を受けたとされるのである。まさに宗祖に於かれて、宗祖のみがそれを受ける資格があるのである。この深義こそ本門戒壇の円慧の根本に確立される実義でなければならぬ。何故ならば、本門の本尊は久遠実成の釈迦如来であり、本門の題目は積尊の悟りの事の一念三千を七字に具象したる教法・行法であ

り、本門の戒壇は本尊が告敕する現前で七字題目を受持し、広宣流布を誓言するところであるからだ。

元々、宗祖は本門の戒壇には円戒・円定・円慧が備わるものでなければならぬと述べ円戒のみがあればよいなどと戒壇を狭義に考えておられない。従い、宗祖による本門の戒壇は多機能であり、法華経の教えを時代に即して広宣流布する動力源であると見做してもよいのではないか。戒・定・慧が一体という祖意に従えば、事の一念三千、本因・本果の法門は本門戒壇の円慧の実義に据えるべきである。

六、三障四魔必競起こるは本門戒壇の円戒の実義なり

「法華経を行ぜし程に、世間の悪縁・王難・外道の難・小乗経の難などは忍し程に権大乘・実大乘経極たるような道綽・善導・法然等がごとくなる悪魔の身に入たる者、法華経をつよくほめあげ、機をあながちに下し、「理深解微」と立、「未有一人得者」、「千中無一」等とすかししものに、無量生が間恒河沙度すかされて権経に堕ぬ。(中略) 日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり。これを一言も申出するならば、父母・兄弟・師匠国王王難必来べし。いわずば慈悲なきにたりと思惟するに法華経・涅槃経等に此二辺を合見るに、いわずは今生は事なくとも後生は必無間地獄に堕べし。いうならば三障四魔必競起こるべしとしぬ。・・・(中略) 法華経は一句一偈末代に持がたとしと、とかるるはこれなるべし。今度強盛の菩提心をおこして退転せじと願しぬ。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三〇二頁)

弘教の出発は戒壇を踏んだ瞬間から始まる。行者を志ざす者には生死一大事の宿命を頂く一瞬となる。そのときから、世の中を見つめる眼が変わり、世の中から視られた自分という自分を成長させなければならぬ。そこに、三障四魔が必然的に発生する。好むと好まざるとに拘わらず、それ等との厳しい対峙が続く。その裡で、自分自身を人情味豊かで不屈の法華の僧に育て上げて、健康を保持し、ひたすら弘教に邁進せねばならぬ。

一方で、本門の戒壇はすべての行者の生涯に対し指導する責任を負う。授戒を為すとはそういうことだ。植えつけられた種に永遠に責任を荷うのが本門の戒壇であり、そうした広布の前線にある者の為の実践的な教育機関はいまどうしても必要ではなからうか。

三障四魔は法華行者の鏡である。行者あらば三障四魔は影のように必ず付き纏う。故に三障四魔は本門戒壇における円戒の実義と置かねばならない。

七．宗祖の六波羅蜜の忍辱は本門の戒壇の円戒の実義なり

「今末法の始二百余年なり。「況滅度後」のしるしに鬪諍の序となるべきゆえに非理を前として、濁世のしるしに召合せらずして流罪乃至寿にもおよぼんとするなり。されば日蓮が法華經の智解は、天台・伝教には千万が一分も及事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事おそれをもいだきぬ

べし。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦ご遺文 三〇五頁)

大難四力度、小難数を知らずの宗祖の御難を忍び抜く力、赤子に対する母の勝れたる慈悲の情愛。凡その歴史上で最も尊敬する代表的日本人あるいは代表的人物として二人の優れたキリスト教信者（内村鑑三、矢内原忠雄両氏）から指名される宗祖日蓮大聖人。その国家権力に対した忍難慈勝の不屈の鬪魂は末法の始二百余年のものに過ぎなかつたのか。否、末法万年と続く現代そして未来にかけ、仏・法・僧が関わるならば、忍難も永劫の戒であろう。宗祖の次の教示に

「今の世の僧等日蓮を讒奏して流罪せずば此經文むなし。又云「数々見擯出」等々。日蓮法華經のゆえに度々ながされずば「数々」の二字いかんがせん。この二字は伝教・天台いまだよみ給わず。況余人をや。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三〇五頁)

よみ給わずとは、余人は数々の法難に会うことも無く、例え、僅かにあつたとしても耐えるほどの世では無かつたということ、末法時代の僧においてはすべからず壇を踏んで強盛の忍辱心があることを誓言し、自立しなければならぬ。もし誓言なき者には戒壇を踏む資格は全く無い。共生の時代、余宗との軋轢、増える無信仰者からの在らぬ批判。これらに対抗し得る忍辱心は、本門戒壇の円戒の実義である。

八．宗祖諫行の罪は本門戒壇の円定の実義なり

「当世法華の三類の強敵なくば誰か仏説を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん。南三北

七・七大寺等、猶像法の法華經の敵の内、何況当世の禪・律・念仏者等脱べしや。經文に我が身普合せり。御勘氣をかおればいよいよ悦をますべし。例せば小乗の菩薩の未断惑なるが「願兼於業」と申して、つくりたくなき罪なれども、父母等の地獄に墮て大苦をうくるを見て、かたのごとく其の業を造て、願て地獄に墮て苦に同、苦に代れるを悦びとすることし。此も又かくのごとし。当時責はとうべくもなければども、未来の惡道を脱すらんとおもえば悦なり」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三〇六頁

つくりたくなき罪をつくるとは何のことか。宗祖はここで小乗の未断惑を取り上げておられるが、ここでは常不輕菩薩の但行礼拝の罪のことを例としたい。世人は但行礼拝と刀杖の難を以て常不輕菩薩を礼賛するが、但行礼拝は罪つくりでもあることを知る人は少ない。それは「常不輕菩薩品」の長行と偈頌との構成に原因があるのであろうか。

「専らに經典を誦誦せずして但 礼拝を行ず(中略)我れ汝を輕しめず 汝等道を行じて皆 當に首に作仏すべしと 諸人聞き已つて輕毀罵詈せしに不輕菩薩能く之を忍受しき 其の罪 畢え已つて命終の時に此の經を聞くことを得て六 根清淨なり 神通力の故に壽命を増益して 復 諸人の為に廣くこの經を説く」

『常不輕菩薩品』第二十

まさに、無誦誦の但行礼拝は罪つくりである、と經は説く。その罪は死に臨んで聞いた法華經により消滅し、有難いことに更に壽命を永らえ、今度は法華經を解説する五種法師の菩薩へと生まれ変わってゆく。法華經が説く、これが不輕菩薩の忍辱と罪の眞の姿であります。

「此に日蓮案云、世すでに末代に入て二百余年、辺土に生をうく。其上下賤、其上貧道の身なり。輪廻六趣の間人天の大王と生て万民をなびかす事、大風の小木の枝を吹がごとくせし時も仏にならず。」

『開日抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三〇二頁

宗祖ご自身は下賤貧道の身にして、前世に善き身に成れたことがあつても佛に成れなかつた。しかし、法華經を行ずる様になつて、地獄に墮ちてゆく三類の強敵のいることが解るようになったと宗祖は述べられる。その宗祖が常不輕菩薩を熱くご覽になられている。

「不輕品に云、「其罪畢已」等云々。不輕菩薩は過去に法華經を謗給う罪、身に有ゆえに、「瓦石をかおるとみえたり。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三四三頁

宗祖は過去の謗法が重なる原因とみて、法華經不誦誦の礼拝行とする原因説を補強している。然らば、宗祖は自らの三度に渉る諫曉行為を何故に罪とみなすのであろうか。いま引用の常不輕菩薩が前世において謗法の罪を犯し、現世でも不誦誦・礼拝行という罪を犯したように、宗祖も前世について

「我無始よりこのかた、惡王と生て、法華經の行者の衣食田畠等を奪とりせしことかずしらず。当世日本国の諸人の法華經の山寺をたうすがごとし。又法華經の行者の頸を刎くと其数をしらず。此等の重罪はたせるもあり、いまだはたさざるもあるらん。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三四六頁

と述べ、今国土の謗法を責めて大難を受けるは過去の重罪が招いたものであると云う。こうした前世の業はさて置き、国家諫曉は現代社会においてはどのような形態を取ることになるのだ

ろうか。宗政一致とも云われてもはや、あり得ない行為なのか。或いは、大衆行動としたら想定できるのか。或いは、別組織の政党ならば公認されるのか。

いずれにしても、宗祖の国家諫曉は国を導く立正安国の教説として、本門戒壇の円定の最たる実義としてよいであろうし、宗門あげて追及すべき課題であろう。

九・誓言は本門戒壇の円戒の実義なり

「又今よりこそ諸大菩薩も梵・帝・日・月・四天等も教主釈尊の御弟子にては候え。されば宝塔品には此等の大菩薩を仏我が弟子等とおぼすゆえに諫曉云「諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後に誰か能く此の経を、護持し誦誦せん、今仏前に於て、自ら誓言を説け」とは、したたかに仰下しか。」

〔開目抄〕池上本門寺編 朝夕諷誦 三一五頁

およそ、社会にあつて、重要な責務を引き受ける時、依頼者に対して本気で、約束し、誓い、或いは契約する筈である。弘教の付属を受けるときの誓言は、俗世を超えた全身全霊の、一身を投じるほどのものでなければならぬ。本門の戒壇では受戒者は円戒の実義であるという意味を理解した上で誓言を述べるのである。

一方で、授戒者は厳粛な作法・儀式を以て本門の戒を授与する。授与は誓言を必要条件とする。よつて、誓言の発露は授与と相俟つて本門戒壇の儀相なのである。

「爾の時に薬王菩薩摩訶薩及び大樂説菩薩摩訶薩 二寓の

菩薩眷属と俱に皆仏前に於て是の誓言を作さく。」唯願わくば世尊以て慮したもう為つからず。我等 佛の滅後に

於て 當に此の經典を奉持し 誦誦し説きたてまつるべし。」

〔勸持品第十三〕

「復 学 無学の八千人の受記を得たる者有り。座より起つて合掌し 佛に向いて是の誓言を作さく。世尊 我等亦當に陀の国土に於て 廣く此の経を説くべし。」

〔勸持品第十三〕

「時に諸の菩薩 佛意に恭順し并に自ら本願を満ぜんと欲して便ち仏前に於て獅子吼を作して 誓言を設さく 世尊 我等如来の滅後に於て 十方世界に周旋往返して能く衆生をして此の経を書写し 受持し 誦誦し その義を解説し 法の如く修行し正憶念せしめん。」

〔勸持品第十三〕

「我 當に善く法を説くべし 願わくば佛安穩に住したまえ 我れ世尊の前 諸の来りたまえる 十方の佛に於て是の知き誓言を發す 佛自から我が心を知しめ。」

〔勸持品第十三〕

勸持品にはこの引用した通り、多くの誓言が現れ、み仏に誓の言葉、誓言を元氣よく述べている。これらは、本仏の面前で述べるということが通常であり、代理が述べるとしたら誓言の厳格さは失われる。本門の戒壇では一層の厳格さが問われる。

十、本仏の誓言は本門の戒壇の円定の実義なり

「我本誓願を立てて、一切の衆をして、我が如く等しくして異なることなからしめんと欲しき。我が昔の所願の如き、今者已に満足しぬ。」等云々。諸大菩薩・諸天等此の法門をき

いて領解云「我等昔より來、數世尊の説を聞きたてまつるに、未だ曾て是の如き、深妙の上法を聞かず」等云々。

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三二五頁

本佛の誓言は未來永劫にわたり絶対的な慈悲行であり、本門戒壇の円定の実義以外何者でも無い。

十一・ 仏の勅宣・鳳詔・諫勅は本門戒壇の円定の実相なり

「大音声を以て普く四衆に告げたまわく、誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん。今正しく是れ時なり。如來久しからずして当に涅槃に入るべし。仏、此の妙法華經を以て付属して在ることらしめんと欲す。等云々。」第一の勅宣なり。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三二五頁

「諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後に、誰か能く此の經を、護持し読誦せん。今仏前に於て、自ら誓言を説け。第二の鳳詔也。」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三二五頁

「我が滅度の後に、若し此の經を持って、一人の爲にも説かん。是れ則ち難しとす。諸の善男子、我が滅後に於て、誰か能く此の經を、受持し読誦せん。今仏前に於て自ら誓言を説け。」等云々。第三諫勅也。第四第五の二箇の諫勅、提婆品にあり」

『開目抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三二六頁

勅宣・鳳詔・諫勅・諫曉等は仏の命令又は指示という、ほぼ同じ行為に対して使用されている。誓いを求められていることは

五種法師の修行である。求められる誓言は仏の励まし、という場合もある。逆に、自らの意思で誓言を説こうとして仏に断られた例がある。

「爾の時に他方国土の諸の來れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に過ぎたる大衆の中に於て起立し合掌し禮を作して佛に白して言さく。世尊 若し我等佛の滅後に於て此の娑婆世界に在つて勤加精進して是の經典を護持し読誦し書寫し供養せんことを許したまわば當に此の土に於て廣く之を説きたてまつるべし。爾の時に佛諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく 止ね善男子 汝等が此の經を護持せんことを須いじ。」

『從地湧出品第十五』

その理由は単純で、娑婆世界の弘教は前から予定している地涌の菩薩達がいるからである。そこで考えなければならぬことは、我々は當にこの娑婆世界に生まれ、現世はここでたった一回だけの生涯を送る、ということだ。自分だけでなく、山川草木、有情・無情が共生できるように、法華經の世界觀・社会觀・人間觀を整備し、それを正面に打ち出し広宣流布に情熱を燃やさねばならない。その為にも、戒・定・慧を一体とする本門の戒壇の建設を一刻も早く、始めなければならぬ。北朝鮮に投致された被害者と帰還を待ちわびるご家族の、空しく時代に取り残されてゆく姿に、時間が持つ厳しい意味を痛い程、思い知らされます。「三大秘法は建立した。さあ、広宣流布をしましよ」と『法華取要抄』に述べられた上行宗祖の尊い思いの戒壇建立を、今こそ実現すべきです。この仏の勅宣は本門の戒壇の円定の実義である。

十二、仏の付属は本門戒壇の円戒の実義なり

「法華經の第四宝塔品云「爾の時に多宝仏、宝塔の中に於て、半座を分ち釈迦牟尼仏に与えたまう。爾の時に大衆二如来の七宝塔中の師子座上に在して、結跏趺坐したまうを見たてまつる。大音声を以て普く四衆に告げたまわく、誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん。今正しく是時なり。如来久しからずして当に涅槃に入るべし。仏、此の妙法華經を以て付属して在ることあらしめんと欲す。」等云々。第一の勅宣なり。」

『開日抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三二五頁

宝塔中の釈迦牟尼仏の勅宣は鼓膜が破れるほどの大音声です。それで応えられる者は誰ひとりとしていない。しかし、その雰囲気は本門戒壇の運営上に大いなる参考となります。まず、氣迫です、発奮です。次に、心身ともなる礼儀です。

「爾の時に佛 上行等の菩薩大衆に告げたまわく。諸佛の神力は是の如く無量無辺不可思議なり。若し我れ是の神力を以て無量無辺百千万億阿僧祇劫に於て属累の為の故に此の經の功德を説かんに猶盡すこと能わじ。要を以て之を言わば如来の一切の所有の法 如来の一切の自在の神力 如来の一切の秘要の蔵 如来の一切の甚深の事皆此の經に於て宣示顯説す。」

『如来神力品第二十一』

宗祖はこの『開目抄』において、不思議なことに神力品のこの四句要法に關した論述を全く為さらない。上行菩薩に關するこれ程重要な經説に全く触れないのは何故か、

「此千世界の菩薩の中に四人の大聖まします。所謂上行・

無辺行・淨行・安立行なり。此の四人は虚空・靈山の諸大菩薩等、眼もあわせ心もおよばず。華嚴經の四菩薩・大日經の四菩薩・金剛頂經の十六菩薩・等も此の菩薩に對すれば、翳眼の者の日輪を見るがごとく、海人が皇帝に向奉がごとし。大公等の四聖の衆中にあつしにいたり。商山の四皓が惠帝に仕にことならず。巍々堂々として尊高也。釈迦・多宝・十方の分身を除ては、一切衆生の善知識ともたのみ奉ぬべし。」

『開日抄』池上本門寺編 朝夕諷誦 三一六頁

と述べ、ただただ四菩薩に最大限の賛辞を贈られる。四菩薩に關する記述は僅かこれだけで本抄中には他に全くみられない。実に不思議である。

そこで私流の解釈を適用すると、宗祖がこれ程迄に酷い受難に堪える半生を過ごしたことで上行菩薩の応現者と言われるならば良しと出来るかもしれない。しかし、上行菩薩に宗祖の如き難渋の半生をお過ごし頂くことは憚る。而も、まだ広宣流布は始まったばかりである。末法未來の世には更に折伏をもって戦う道を選んだ。私が代苦を背負いましょう、と。

(次号へつづく)

※本稿は「本圀寺報」第七号(令和六年六月二十七日)一一八頁より抜粋したものである。一部、明らかに誤植と思われる箇所は訂正した。